俳諧饒舌録

下

へ5
730
2

門 利5
號 1/30
巻 乙

饒舌録下巻目録

さとしたむきび辞　七十八のゑ
こそたれ部　七十九のひ
外ちむきび辞　八十六のゑ
ほうれ部　八十九のひ
うちれ部　ヤムうるの法　形ひのゑ　百十一のひ　百六のひ
ほうれ部　百十二のゑ
下知まて切り格　百十四のひ

明治三十五年十月十一日購求

ホ□それ部　百十七丁ウ
余情をふくめる例　百十八のひら
正親白　百二十一のひら
五十字韻　百二十二丁ウ
無季發句　百二十四のひら
物乃名　百二十五丁ひら
廻文發句　おなじ　ウ

元木阿弥著

こそ　ぞ　もぞ　ぞ　詞

け

おけ　ひけ　こげ　せけ　きけ　かけ　ふけ　さけ　ゆけ　たけ
やけ　おけ　ふげ　ふげ　のげ　さげ　あげ　いそげ
たけ　あぶむけ　けあひのぐのそこきれけをつく

せ

させ　こせ　やどせ　ふこせ　ませ　おせ　ふけせ　かこせ
くせ　ふぶせ　のこせ　ちこせ　こうせ
けあひのぢれたふきれぜをつく

て

まて　そて　うて　こて　ゆて　そて　ふて　こぶて
けあひのつけそふきのてをつく

ね

ちこね　ちかきね　いこね　りもかね　ちこね　せねこね
けた　こひのぬ　のそこきれぬをつく
上ぞのや　髮おそてふる時ハちこぬ　ふぬ　きこねとむもぶ格く

へ

とゝ　ゑ　あゝいゝう　ゑゝ　をゝ　ちゝ　つゝ　あゝ　ゑゝ
むゑゞ　さけゞ　いゝく　あゝく　うゝく　まゞく　ゐゝく　ゝゝく
うめゞ　ゝゝの〳〵　けまひのぷれをゝ〳〵きのぷをいふく

め

まあつめつゝめ　をゞめ　まあいめたゝめ　をゞめゝゑめ
ふゝゝめ　くめ　ゝゝめ　あゝふゝめ　をゝめ　ゝゝめたゝめ
けまひのむゝをゝ〳〵きれめをいふ又
ゑめゞめ　せめ　いゝゝめ　ゑゝあ　らゝ　けめふゝてめ
ゝれゝんのゝゝ〳〵きれめをゝふく

れ

ゑれ　をれ　ちれ　ふれ　てれ　いれのれ　やれ　ゞれ
ゝれ　ちれ　くれ　ゝれ　ゝれ　おれ　ゆれ　けれ　ゝれ
ゝれ　つれ　ゆれ　行れ　くれ　ゑれ　ゝれ
ゝれ　ゑれ　ゝれ　をれ　くれ　まれ　ゝれ　めれ
をゞれ
けまひのゝぷれをゝ〳〵きゝれぷをいふ又

はれ　めれ　ゆれ　ゆれ　ゝれ　くれ　ゝれ　ゝれ　ふれ
けまひのゝぷのゝ〳〵きれぷをいふ
けれ　ゝれ　あれ　ゝれ　せれ　へれ　ふれ　れゝ　をれ　ゝれ
めれ　けまひのゝぷゝをゝ〳〵きのぷをいふ

ゑ

ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　こゝ　せゝ　をゝ
いゝ　あゝ　ゝゝ　ゝゝ　ふゝ　てゝ　ゞゝ
けまひのゝをゝ〳〵ぷゝつゝよゝつゝく　格ゝれども　そゝの
や　殼ゝゝゝホのむをゝびゝとゝゝゝてハ切ゝく

ゐ

けゝかゝハかゝどゝもの畧言ゝれゝバをゝてよむゝべゝ　濁ゝハひゞゝるゝこ

現在き

是ハ日本紀万葉集ハ例あれども古今集ゝりゝれゝとハ
ゝゝ

あゝ　めゝゝの　ゝゝく　らゝ　ゝゝの　ゝゝく　けゝゝ　ぷゝゝの　ゝゝく

こそ部　けせてねへめれ

け

紅乃糸こそきけ鹿の声　英夫

是ハ糸の音ハ鹿の声こそ聞こゆ切字

松き　是ハ〳〵紅葉ハ秋ハ鹿の声こそ聞こゆ切字

せ

かぞへても年こそかゝせ除夜の夕　図夕

是ハ除夜の夕こそ年こそかゝせと切字

仮撰　家〳〵ぬ家ハ秋の夜をかゝこそおもしろきかな

是ハ下より三の句上へ〳〵ちらして置きこそ

て

山里ハ花よりこそ都人　塔四

是ハ都人ハ山里ハ花こそまさる切字

古今　宮城野のそこ〳〵ゆ〳〵れ小萩　露をおもみ風を待つ事をこそ

ね

二つこそ老ハ名ゆ年の雪　蓉相

是ハ二つ老ハ名ゆ年の雪こそ老ハ切字

ね

是よこそ飯小花まねき鍋　蓉太

是ハ初鍋こそ飯ハ花まねき切字

ね

あるゝ秋の乃こそ乃ぬ雪　嵐辛

是ハ乃ぬ雪こそ乃ぬ切字

古今　春ハ花の園ハあやめ　梅ハ白色こそ香ハ

是ハ香ハ梅こそ香ハ切字

へ

煙を掃家こそ人物こそひ　秋夕

是ハ物こそひ煙こそ人こそ切字

古今　折つれハ袖こそ匂ひ梅の花　ありとやこゝふこそ

め

仮名書を高て落ることを時雨　其角

是ハ夕きりれみのを高て落ることをいふ

仮撰　きれみのよ人をぐるもやゝめ　涼ハ蓑ハつまで手をこて〳〵め

め

炭焼のおやぢ妻こそ思ひ〳〵め　重五

古今　夕月夜おぼつかなきを見てげふ入れ浦ハあけてこそ入めり

是ハ月入のこと〳〵きん

日　大原やをしほの山もいたくこそ神代のすゑもあはれなりけれ

是ハおもひ〳〵ん

日　逢ことのわびしきことをこそ思ひ〳〵ん

是ハ月入のこと

日　あらでこそおもひ〳〵ん中ハ人をあはなめとぞふるの三まれることを

是ハあ〳〵ん

日　ちりぬれば恋ぬれどもなき物とりふことを桜をぞ思ひ〳〵め

是ハ花のこと〳〵きん

日　花の香ふかぬ〳〵ぬらんとも咲まさり　ハにしるこなる時ハぶれ

是もはぬ〳〵ぬんとも花ひ〳〵ぬれ〳〵ん

らし〳〵ぬ

めるたく〳〵　紅ふ　ゆ　ゆもとも交ぬ〳〵ん

世の中ハ〳〵ぬ　桜舟

とりふあり是ハ下よりもこゝて

● 桜舟世の中ハ〳〵ぬ

と為ることをこそ思ひ〳〵ん

ぬ〳〵め　といへるハこのこゝ古ふ和せる古人の

例ふ古ぬ〳〵ぬ

しれ

元日は田毎の日こそ恋しけれ　はせを

拾遺
あはれなる今ハ声こそきかまほしけれ

● そのまゝなる句

● ひがん戦に進めばさらに狩

● 明寐もさゝるゝにぞおかしけれ

是ハ上ニ同こそともなきにれと留るがそのさま

古今
逢ことハ今こそまされみなせ川なかにふかめておもひそめなん

是バ下の句ニて切りしなり

れ

ちるからバ月こそいづれ散さくら　苳太

是ハちる桜ぐでらせバ月こそいづれと切る

日
沖津波高師の浜松の名にこそ君をまちつゝわたれ

れ

箕ハ保谷が首れ貴こそ甲なれ　仙化

拾遺
ちるをれてふこともかなしハまみれども見えこそおもはめ

れ

傘たゝむ音にこそ志れ初時雨　蕉太

是ハ初しぐれかさたゝむ音にこそしれと切るなり

古今
行けどなほ蝶花をりたる時らしようハおもふれともこそあれ

れ

新人数舟なればこそまぶみすれ　其角

れ

嶋むろは菜にこそ時雨なれ　同

此嶋むろハ魚の名なり　是ハ英一蝶が流されるとて其角ニ名残をおしみて嶋守となりながら魚をもさまて世のうつしひせんに魚の腹へ木の葉を入置しとなり其をおもしろがりしを　おのれがひさしくとせひくれのならひて　ゆかれぬ其角年々にむかしをおもひいでゝ或時たよりにて魚のかはりに木の葉のつゞきたるを送りて是こそ鮨なりつると申つかはし一蝶が方へ申入たりしかば一時の発句となりぬと嶋中一蝶蕉門の人ともにありき　此句

下ゟ上へ

●俗もろ〻の業をなすこそ時々あり　とあり
是ハ寄〻俗りあるべし　されや疑ひそ　ふりうりて
引ふと云りる例多し　又下ゟ
●什人数舟あれば　こそもぶみうふ　とあり
是もおなじ同じ　されハ寄本の方を用ふ上りこそ
みそうりてもももそびて　詞そもそび下ゟの舟
本のくりゟて　ふとも　つい　ともつるる
連哥の多句ゟ
神ゟこそ契れ　[illegible]
是ハこそをれともそびられば下ゟ　ふともそる
又耳底記ゟ
されバ　こそ　[illegible]
是もこそをるるの　[illegible]
ともいまるるこそ　例ゟ　[illegible]

古今　愛とこそいふべうりられ世中ふるうるとおもひけるる
同　岩石ゆく水の走り波立つりかくこそハ見ろ行べもあるる
千載　ざもこそハ氣とぶむべき世ふれど　[illegible]
怪抄出　ゟこそ　都の外ゟ者りせめるるて　[illegible]
かくれでくこそ　[illegible]
ももびてハ下ゟ　[illegible]
夫木　月ゟこそ　[illegible]
是ハ月ゟこそ　[illegible]
下へつきて下ハ　[illegible]
後古今　ちるゟこそ人の　[illegible]
是ハ下ゟこそ人の　[illegible]
きぶもちる人むまび　[illegible]
ろろへをゟハ　[illegible]
うてをと文て下へつけられば下ゟ　[illegible]
いとるる

右成るぞ
さればこそハおもしろきとぞいひなかく露もかわかぬ袖のうへかな

是ハさればこそハ同じおなじき哉れといふてなる手爾をはとふむすび詞をとへかくまぜらる物なればバ下ニ留まるものなべてこそハむすびの詞をふくめるものなり
此例ニハ余情あり
是等の例ニおなじへてこそのかかりかるある例なきことを知るべしすべてぞもりかりの詞や疑詞もそのむすび詞ありてむすびてハ下の詞外のかかりにて留ともいふなり

現在のき

ハこそよりかかりてきとむすびしるハ日本紀萬葉集ニ例あれども古今集よりこなたにハなしされバこそよりかかる時ハきハ多けれともきハ稀しなれとむすぶべく

三百五十五 **し**

夕立の雲となればこそ月ハ見し　三百五十六　渓花

三百五十六のしハつゞきつゞく格なれども疑のや疑ごそ共のむすびとある時ハ切なく

作撰
とみぢ萩たちしき錦と見しらくも時なとぞ思ひなりてこそこし　三百五十

三百五十七 **しり**

きみふこそ若菜摘しり大根引　壺雨

是ハ大根引きみふこそとふつゞしりと留りより此しらと留る カハかともの男言にて其へ余情ありてやまぬて留まるそのく

作撰
あひも見ぬおもげれどもそれぞ行りし時おもふこそ思ひなりしら

らし

梅盗む人の袖こそ白ふらし　亡風

こそよりかかりてらしとむすぶるらしのこと

作撰
松の枝ニ風乃声べをまかせてハ立田姫こそ秋ハ知くらめかし

けらし

市なとこそ夏来にけらし蚊屋　壺谷

是ハまさしくそれ市なとこそ夏来にけらしと切なり

形式へ
このくとまここそ夏来にけらし天のかぐ山雲たなびく
○こそよりかかりてけらしとむすぶるハ用ゐられとく

上 こそうかるる時は けらしハ けれらしの こと
上 そのや 殷は けらしハ けるらしは こと
上 外うかるる時は けらしハ けりらしは こと

こそ

十九二十の格

こそ十九 さ夜ふけてこそ行かきまれ霜の宿 左京太

是ハこそうかりて詠める詞なれ共と為るゝ下へ為れと
二字入て用ゐて今を実と為て伝の詞なるゝ
くけ詞を係る格の例なれ共例は出しられば是を限

こそ十九 おとゝこそ風狂乱のうぞさうら 宗因

是もこそを係と為るゝ下へ為れと二字入て実十九の格之

こそ十九 雲のあけばこそ岩の苔 了阿

是ハ谷の苔雲のあけばこそ表と為るゝ下へ為れと二字入て実十九の格之

こそ十九 時雨こそ今宵小春の月 作者不知

是もこそを係と為るゝ下へ為れと二字入て実十九の格之

こそ二十 清水こそ明るも夫神鳴 其角

是もこそを係と為るゝ下へ為れと二字入て
てふをとを合て実と為て二十の格と為れハ為るの之

こそ〻為る格 是もこそ係為れも上のゝ如く格為れ共こそ
こそ〻為る下へ二字三字過て詞を入て実と為

二十こそ 我まとる船もかゝとこそ古暦 英太

是ハ下より上へ上へ詠まれよる為ハもくこそ〻
為るこそこそ為るゝ下へ為れと三字入て実と
こそ為ハ二の句つゝよて為るゝ下へ為れと三字入て実と
め上の句つゝよて為るゝ下へ為れと三字入て実と
まくる外

九こそ 一ツ家に人のなさけもふるさこそ 拗月

[illegible]

古今 津の国なるあしべの山城のくまのひらんたるをみこそ。

なほ [illegible] あしたづの [illegible] 年ハへぬれども [illegible] 雲のうへのこそ。

[illegible] 見ハこそとあるべきなり下へ四・三字入てゆきこと

万葉 [illegible] 見ハこそとあるべきなり下へ [illegible] 三字入てゆきこと

[illegible] 見ハせどうらなるて中の七文字のかつらてこそ

あるべきなり下へ [illegible] 三字入てゆきこと

をハつくゆきり [illegible] 「くもりあるほしのそハ」 [illegible] のこと

[illegible] 我ハ見えども人目あるさよこそ [illegible] 山つくゆきり

ゆきの雪風 [illegible] ハたびゝ [illegible] あめのきこと

をふくまセて [illegible] 「よをとあるべきこと」 [illegible]

●こそあり [illegible] のこと [illegible]

子五百 ●花もあゝ [illegible]

見ハ詞の [illegible] 四字の [illegible]

[illegible] 二字三字の [illegible]

いひみてもまぶ格

いひみ 面かこそ侍乳の山は都に

見ハあよこそまて [illegible]

[illegible]

金紫 [illegible]

見ハ [illegible]

[illegible]

野秋 [illegible] 延法津を [illegible]

見ハいひみてむまびやハ [illegible] 言まて [illegible]

外よりかゝる時のむまびことば

六 く

あく ひく こく せく きく かく ふく さく ゆく たく
やく そく うく のぞく さぐ あぐ いそぐ たく
あざむく けまひのぞく
けまひのぞくハぞの中 髮ホも外よりかゝる時もむまび何ハ
ゐ段ド一ツ何ゐるあく

く

かくなむく あく あぐ さぐ つぐ
けまひのぞくハをるゝもいそゝを外のうり此時ハ
あぐたむく ゐもむまぶ格く

六 て

上よりぞの中 髮ホあるてゐる時ハ ゐる。あぐる。たむる。
ゐもむまぶ格く

こまやぐまて さまて ちまて あまて ちどまて あまてまて
かまて ふまて ゐまて
けまひのぞくハをるゝハつそれぬぞをゐふけまひのぞくハぞの中
髮外よりかゝる時もむまび何ハゐ段ド一ツ何ゐるあく

て

上よりぞの中 髮ホあるてゐる時ハ ゐる。まる。きる。
ゐもむまぶ格く

ど

ゐまど きまど ゑまど あまど いそど せど
ゐまど きまどど ゑまどど いそどど せどど あどの髮ひく

ド

ドハ里音ハ マイ とゐるべど ゐまどど きまどど ゑまどど く
上よりぞの中 髮ホあるてゐる時ハ ゐる。きる。と不ぬ。ゐて
むまぶ格く

つ

まつ ゐつ ゐつ きつ
けまひのぞくハをるゝハつそれぬぞをゐふけまひのぞくハぞの中
髮ホよりかゝる時もむまび何ハ段ド一ツ何ゐるあく

つ

ゐつ まつ まつ ぞつ ぞつ くつ
けまひのぞくハをるゝもいそゝをゐつまつともむまぶく

上よりそのゆ髮ホそくる時ハそつるゝもむまぶく

ぬ

早ぬ　きりぬ　こりぬ　まぬ　ぬびぬ　ふりぬ　ちりぬ
なづぬ　見ハ風おろのふぬく

上よりそのゆ髮おそくる時ハきりぬ。ふりぬ。ちりぬ。こむまぶ格く

六

ふ

見ふ　おふ　あふ　いふ　えふ　あそぶ　さそふ　いふむまぶ
つふ　いまふ　くふ　まぐふ　ぬふ　ふふ　かふ　あふ　さけぶ
うぶ　まふ

けおひのぷハそれぬぷをつけおひのぷハそのゆ髮外よりかる時もむまひ同じ一ツ同あるりのく

ふ

高ふ　あふ生　こぐふ　きのぶ　あぐふ　このふ
けおひのぷハ下をぷもいそくをこふぐふ　見ぶ
こむまぶ格く

上よりそのゆ髮おそくる時ハ高ふぐふ。こもまぶ格く

六

むん

もむ　つむ　まむ　いむ　たむ　まむ　まむ　ふむ　こむ
こむ　くむ　ふむ　むを　むを　むを　たのむ　くむ

ヌんらんけん　つまんあん　てん

けおひのむんもおホ同じくそのゆ髮外より
かる時もむまび同ハこふ同じ一ツ同あるこのく

祢ぐふ　三の祢ん　山里詰ハ　テクレ　テクレヨ　とんぐ

む

ふむ　こむ　さむ　こむ　こぐむ　さぐむ　まむ
けおひのむハ下をぷもいそくをあぐむ　こむ
こむまぶ格く

上よりそのゆ髮おそくる時ハあるむ。こむ。
いそくをこ同ハむぷ。こむまぶ格あるあく　くるまる　ふるぐる
ゆるも同ハ見ハ梓ゆいつ折本ゆいつ尺金

ゆ

こゆ　ゆ　まゆ　さゆ　あゆ　あゆ
けおひのゆハ下をぷもいそくをこゆハぷ。こむまぶ格く

上よりそのゆ髮おそくる時ハゆぷ。こむまぶ格あるこのく

伊勢物語

くれなゐにゝほふハいづらしらゆきのえだもとをゝにふるかともみゆ

此歌のこゝろハ

これハかの白雪ふかく人にしられて来りける人乃袖かとぞなる

六

る

みる　しる　ちる　ふる　てる　いる　のる　やる　よする　あする　せる　あせる

かる　ちる　帰る　照る　つくる　ころ　渡る　祈る　みだる

さぐる　さまる　よする　まする　守る　光る　名する　しめる

くぐる　思ひやる　なる

此むすびのるハ下を引くといひてそれぬるにて字の例におのづから切る格をも称するるにて此むすびのるハぞの何や疑ひのくれ時にもむすび詞ハ同じ一ツ詞なるゆゑに此六にていくつづかひなる乃もつハしらんかて常に切る格のもつをていひさまによりて切れもしつゞきもまじるべし

る

なぐる　みづる　まする　きつる　いそる　とぞる　ころ　思ひる

かゝる時

此むすびのるハ下を引くともいひそを　なぐる。　みぐるゝさ

むすぶ格あり

上よりぞの何や疑ひにてうくる時ハみゆる　あがる　など引きていふる付ハ引くとむすぶ格也

り

けり　おり　なり　せり　たり　へり　めり　きり　れり

此むすびハなりとむすぶ格也

上よりぞの何や疑ひにてうくる時ハ此むすびハるふるとむすぶ格

過去

き

ふき　てき　見き　えもき　ゆきき　せてき　いにき　しりき

ざりき　るき　ちりき　ありき　なりき　おりしき

此むすびハ過去のぎふにてむすぶ格也是ハけりの反し乃きなく

上よりぞの何や疑ひにてうくる時ハ過去のしにてざりしむすぶ格也

るし　ちりし　おりし　なりし

現在

し

よし　なし　うし　つらし　あやし　ふかし　憂し　べし

のどけし　めでたし　たのし　尽し　をし　うらめし　ねし

くるし　恋し　うれし　かなし　さびし

此むすび現在詞し。にてむすぶ格也

上よりぞの何や疑ひにてうくる時ハ現在の体にて　よき　なき

うき　つらき　あさき　ふかき　憂き　べき　のどけき　めでたき

れのしき　もひしきなど　月しきといふ詞ハしきとむすぶ格也

まし	なかれまし
らし	らんかれまし
けらし	けりらしのこと

外とハぞのや疑の詞なき外といふことなれバ

てにをは
て　に　を　も　へ　ど　と　で　詞の末

是ハ一切外のかゝりといふてにをは
○此下にてそ切てよむべし

外於部

くぞつぬふむんゆるりきし　現在

⑥く
百姓も麦にとりつく茶摘唄　去来
是ハ茶つみハ百姓も麦にとりつくと切たり

⑥く
秋ハその月夜鴉ハいつも哉　鬼貫
是ハいつと疑詞あれどもすべて下にも文字あるハたゞ詞にて下のむすびにかゝらざれバもよりかゝりてくと切たり

⑥く
有明のまつくらさく連摺　中邦

是ハ連摺てふ所のちからくまさくと切たり

古今
神辺ちかく家居しせれバうぐひすの鳴なる声ハあきれもきく

同
千鳥なく佐保の川霧たちぬらし山の木の葉も色まさりゆく

新勅
山さくら咲ちる時を来をそへてよきひハ花のかげ有りゆく

⑥む
暮れや小雨麻なぞも花の春　一鷺
是ハ花の春ちれやうにと雨麻ちぬと切たり

⑥む
露霜を嵐に堤に坂屋と冥也　如行
是ハ春よりかゝりてむと切たり此句をまさしくとよむ人ハてにをはのそのひをしらぬ人也又よしむとよむ人ハ句のとゝのひをしれる人ハしかるべしまさしくハとへバつゞく格也
うむとらへハ切て格也

竹取物語の文章
つゞくあれ茶くひもバつげれとのまふをうけてあそれやしかあしんとまうしき　と有

⑥む
月に雲さえりハ宿也雲隠れ也　典立
是ハ月にそれもあれにきえりバやそもそと切たり

万葉
我君にわけはこふらしたまひさるつばなをくへどいや痩にやせ
けりやいいよくこりふこと

ぞ

やぞし死ぬけしきもみえでぞ蝉が声　ばせを

是ハ蝉が声やがて死ぬけしきもみえずと切る也

ぞ

猫の恋初手の声に恥ともせず　楽飢

古今
蓑むしハおしもやまめびらくともうつふひとあそんしこと八あるぞ

ド

九つも十日も声はしどみすれ菜　五冊 沾山

是ハみすれきく九つも十日も声はしどと切る也

ド

鈴虫なる縁にハつれど萩乃露　こめ

是ハ萩乃露鈴虫に縁につれどと切る也

千載
恋死なん身ハをしからじ逢ことにかへんとまでもおもふ人ぞ

同
つれもなくなりぬる人の玉章を思ひ出乃ゆるみとはせじ

つ

いふこと人はいはれつ年の暮　路通

是ハとしの暮にいふこと人はいはれつと切る也

つ

立出て家富来あめつ秋のくれ　沾蓬

是ハ秋のくれちかくて我家あがめつと切る也 是ハ詞のかかり也是も外のかかりとはいふぞ

つ

思ひ森の尾に蛇もしつ猫乃恋　其角

是ハ猫の恋思ひ森の尾に蛇もしつと切る也蛇ハいふハへびもぞといふなるべしつ乃つまりハおさく

つ

散りぬれつ梅本にれ下のおこし米　本阿

是ハ梅の木下のおこし米散りぬれつと切る也

後撰
花見にと出にしものを秋の野の花青にまよひてけるかなとぞ

大萩俳諧
萩の月と雪と秋見るほどにふみの時々人おもふげなる

古今
我心なぐさめかねつ更級や姨捨山にてる月を見て

是ハさらし布や姥捨山よりて月をうて我心
あぐらかゝるつと切るり

早ぬ　秋風乃ふゝうごきぬ縄まぶれ　嵐雪

是ハ縄まぶれ秋風のうゝうごきぬと切るり此句ハ方案
四り

あさつゆ我衣をれば色の白のまぶれごゝろ　秋風乃ふく
うれしれ下の白ゝ紙ゝり

早ぬ　白ゝ脱て陸よ初ひぬ衣ごゝく　素行

是ハ更衣一ツ脱てうゝよ初ぬと切るり

早ぬ　ふるさとの白ゝなりぬ月の面　尚白

是ハ月の面ふりゝて今ゝ月にゝりぬと切るり

早ぬ　年暮ぬ笑ふて居ら心ぶ紙ぶゝ　素行

是ハ笑きて居ら心ぶ紙ぶゝと切るり

早ぬ　内裏一ツ雲雀ふて入ぬ昔ゝり　樗豊

是ハあやめ葺ぶりて入ぬと切るり

早ぬ　万合の家ぶれぬ生ゝうぶまぬ　其角

是ハ不ぬ生ゝ下へつぎて所のゝりを早ぬと切るり

早ぬ　郭公今や山ゝ抜をいのらぬ　壽伯

是ハ今やゝゝる今やゝゝるゝと切るゝ
紙をゝ文まへふくめて下ハ山のゝりを　早ぬと切
ゝり早ぬ　ぬゝる　ぬれ乃里浩ハ　テシマフ　ヤウニナル　テシマフタ
ゝゝれべし

形容
人ぶれぶ今や今やゝ　嵐雪

是ハ今やゝゝ今やゝゝるゝ今やゝゝるゝと切るゝ
むまび辞をゝ文まへふくまぶゝる例ゝ

早ぬ　唐の夜ゝみゝかゝりぬ炉ゝ　嵐雪

是ハ菴の花ゝ生ゝ
ナガラ　ゝゝふゝゝまびゝ切るゝ
切ゝ格の有ハ所ゝゝ

邪古今 谷川の深山ゝ清く澄みめぐるまき月乃げもらびぬ

古今 歌をさもむ廿二おく初春をたちまち（テ）年れ梅よりたちまち鶯鳴ぬ

日

其の井さ美つもんとこしらのをちうふ紅ふ乃ぶまぐひぬ

六 ふ むらゝ白ふ紅ふ実さ（マデモ）ちんひさ（マデモ）ゝ孫枝さ（マデカ）

其角

紅ハ紅ふ実さ（マデモ）ちんひさ（マデモ）ゝ孫枝さ（マデカ）

いつ何をふふのをしふぐらげさ（マデモ）の里借ハ（マデモ）（マデカ）

モマタ とんるべしふぐよの里借ハ（ナリトモ）（デモ）あり

六 ふ きぬ〳〵ふるを思ふ年の暮

除風

紅ハ年のくれさまゝのるをおもふとかるう

ふ 春もやゝけしきとゝのふ月と梅

宋紀

紅ハ月ゝ梅まもやけしきとゝのふとかるうやハ閑ゝ

六 ふ けゝ畑よ蟬のくるゝバ花もそぶ

彦丸

今紫 くるゝかき豊のたるうふあふこゝる朝日のさゝハむるうさゝそぶ

続千載 今もるゝもきゝあの日も実るうそふ秋の佛山をおりひとゝやれ

六 む 人よ仰く猿もよをもむ秋れ風

孤山

紅ハ秋の風人よ仰くさゝもをもむ秋れ風

六 む 榎の葉井よ人まあが月ハもむ

樂飢

六 む 洗濯のきぬふをみこむ柿の葉

彦芝

紅ハ柿の紅せハぶゝ〳〵むきぬふ。ゝこゝむとかるうけかゝ

なまハもんゝ〳〵やゝ〳〵あれゝも写本の方よハせんゝ〳〵の。

ありて正し洗濯ふふあゞむるやあるゝもるれハ写本

のををらぶに

伊勢物語 ゆゝりおゝわゝきゝもその田もハ狩くゝのむ我住里よ声ゝたくれハ

紅ハ多まもむさゝふ声ゝ〳〵ゝ〳〵ばゝりおゝわゝき

もその田もハ。あほたのむゝとゝるゝゝ

千載 さゝ波や国ハゝ神のゝゝゝびてゝるゝき都ふ月ゝるゝもむ

六 むん　いちはやき男なるべんのきつねざさ　一井

是は かきつばたのいちはやき男なるべんと切り

六 むん　をしみつゝ日は入あるべん夕さくら　鱗甲

是も夕桜をしみつゝ日はいりぬべんと切り

六 むん　ゆくり霧も上きき宿とるべん初子日　玄東

是も初子日ひとりねもよれあるべんと切り

六 むん　市人よりぐ是こゝんを孝笠　三吉成

是も市の笠市人よりぐ是もこゝんと切り

六 むん　浴繁まき宮業山蓮風ぶるべん　三ふ堂

六 むん　元朝の見る物よせん富士乃山　京臨

是は元朝見るものの山こゝるものふせんと切り是は富士の山とよべこゝるの文字をつくべし

六 むん　宿りせん藤の陰えなる日を　大安成

是は藤のつゝるまる日をとまりせんと切り是も同

ようにつゝるれらそも所のこゝりとよむべん

六 むん　猪食をせて出べんを川鯉　大安成

是も秋鯉をせていでけんと切り

いせ物語　昔をとてこゝりぐ所なる所の所をこゝみぢーめんん

新古今　あれまて風もさつめ苔の衣ふれはあくよ者ハもりけん

古今　秋　昔ハを銘つ所こゝちをさは山乃松のあ家よりそもこゝん

新古今　ひぐれまてをてみてそーいつ〳〵ハ者をもけも是ハさりこゝん

古今　山ちと人も来ぬ世ぬけて来ぬ花ぬ人をやこゝん

六 むん　秋ぐれらん田螺あまの陰をあく　えせ成

是は田螺しれあまの陰をあく秋ぐれらんと切り

廿一 のこゝりて次の句へつゝるこゝく

古今　秋の神ぬ尾をまもりぬ紅葉のあやこゝん金あつゝをあく

是もあやしをなくの「に」ハ廿二のことにて上へかけて
秋の暮れ尾花まじり咲花のなかやらんと
見るべし　此なとにて助字のを「けふの」こと乃「にも
入るべし「山寺に」廿二「ともしを」おもくして　廿六
「波にちられバ沼を家に」廿二「此を」八助字也
又「ふきに」「ちるに」「ふりに」「ふしぎに」「みに」ハ別也　是ハいひかけに
よりて切れもできるなり「ふりも」「ふしぎも」の言時ハ下へ
つづき「ふりも」「ふしぎも」の言の時ハ切るなり

ゆ　村時雨傘の彼岸早八尾西　了阿

（於きヽ）山里の家居ハ〔…〕めぐれど切様の附　〔…〕外ハ尾ゆ

ゆ　だまされし雲の〔…〕の花も尾ゆ　東伯

ゆ　三尺の鯉すめる尾ゆ真の池　社化

是ハ真の池に三尺のこひすめるとの切り也　ゆと留るべく
をうくきづぬふむるを上下交て言ふ也〔…〕

ろふの言葉ふる人あれども〔…〕ゆ留りかね
〔…〕れバあやなくてハ保りあるべし
上より「外の」かり時ハ　尾西　〔…〕ゆ　尾ゆ　ともまぶ
上ぞや　数かぎる時ハ　尾ゆる　〔…〕ゆる　〔…〕ゆる　ともよぶ
とんなべし

（五柴）ちぶ谷のさ紅の（荒俊）〔…〕なる波いや〔…〕おそ住西
ちぶ谷ハ越前也

六 る　あきくて〔…〕秋の蝉　一井

是ハ秋のむしあきくして彼〔…〕と切るなり

六 る　〔…〕頭巾〔…〕一つより　青江

是ハつくし一つより頭巾〔…〕切るなり

六 る　初雪〔…〕縫る　神水

六 る　〔…〕人も年よる〔…〕時雨　〔…〕

是ハ〔…〕人も年よると切るなり

る　山里は冬ぞまさりて寂しさは　都人　雅経

是は冬人山さとも花まさりと切りけるとて冬は人の
もとめそめて何なれども外のうりれは冬といさて冬をも
あぐる　みぐるとも　むそふ格なるものく

竜川屋　嵐山にて錦と云ハられしくてさかぐ木の紫ちるハをしまる
云ハるもをしまるもふるを冬ふれども外のうり
あれバ冬をしまるとむそひて切りるハつゆハ
つゞく格なれども
上ようりぞの門鞍おきてかゝる時ハ冬といさて
冬「ふるとむそふ格なるもの

古今　月ぞすむあぬ人まちるかきくり雨もふるんとびつゝもゆん
是ホも月ハ冬ハ外のうりあぬ人まちるとつりうれるよあぐ
らへて冬をまちるあぐるぬる
といふ格をかるへ

古今　経俊　ちさをみちくしちる長たるみ冬ふらづあきくるら

長雨

ゆゞこゝもまれふまぐみてしの山ハゆきふる
けゞこゝ外よりたるゝ時ぶとむまぶハつゆるゝ切
る格のるまを家乃訓よ切る格のるを持る
家なり

り　盃新よ水橋絵むおくれあり　文女城
是ホハ休むといふ文よりかりくり是をを外のうりをを

り　せをしなき風ハ夏まり化粧活　嵐山
是ハつくりくしをハつあき冬ハやせふりと切る

り　涼柿乃まぐふ秋をおくりくり　更衣
是ハ冬ハ涼柿乃まぐふ秋をおくりくり

り　ふもし夫をうんれだ風あり夏の宣　菊花
是ハ冬の宣ふも夫をうれば風あり夏と切る

り　ふる柳て亀くり雪ふれ雨田川　完来
是ハ冬のまをみて行あり雪ふるまを雨ふるまを切る

り　よもすがらものを笑ひ出でぬる山櫻　乙由
是は山ちくさのきりのもとにてひやうぶ切らう

り　人さへ人も萬ちとなり秋の雪　秋村
是は秋の雪人さへ人もるそちりと切らう

り　うるうり酒の者ふ這せけり　其角

り　朝顔のたすむ側のう蒼けり　木阿

り　花のべは木槿ハ馬よりそれり　も成

り　宵逢ふ青蘋の鈴を拾ひけり　其角

り　松ちりて常ハ新日と成ふけり　不角

り　くる年ハくるてそれよけり　麦川

り　初ちくれ猫も小位義を居げり　も芭蕉

り　折れぬちり折れぬ敬ふけれ　鬼秀
是ハけれ花折れぬちり折れぬ敬ふけれ

り　大雪水のうへをふるる光り　和之

り　ほ苗ほて命れ生きく花せり　宗因

り　むの吉すぐ紀貫ハおりけり　了阿

り　先ふるむ椎ハ木ものり　芭蕉
是ハ京本立先ふるむ椎ハ木ものり

り　大和路ハ重れ春の芽ふる　大庫
月

り　風乃吉ハおりけり海ハ音　言水
是ハ海ハ吉ハおりけり海ハ音

り　ゆれあるまハみてりなの月　夜鬼
是ハ海の月中れあるて火ばぱてりと切り

り　松の月枝ふりけりりをりり　東山
これハ切り格二ツくさありり是ハ下のりまを切るく

り　入相ハそらをなりり　月　雨　海巨
是ハ六月ゐ入おハられてのちりとかり

り　風まで八二階よ梯りり　郭公　桃隣
是ハ庭ゝきたまでハ二ちいみ和りりと切り

り　夕凪の毛よぶりハありりけり　乙由

り　色くをんて白菓へどりり　別糸

り　鳥列つめれて生りり　朝さり　文末
是ハ あさりりをりめれてゐりりとかり

古今　みちくハ花のちりもがなりめり　昔の枝よかりきたりりせよ
今撰　苗代の水ハ稲ゐよりりをりり　民やをげある君が時代この歌
古今　ちるさくなりゆ一春長れ都ゐも色ハくをゝ花ハされり
新古今　初雪のふるれ神枝らづられてちめり山辺ハ冬ごりり
拾撰　いゐ海れ波乃りけゐるさはあれどふきんハ虎ふちづめり
拾遺　神立月ちづれ一めゝ一菖の系れゝこゞる和よ庵もゐくり
古今　あゞありと名よこそたてれ桜ゐくふれゐる人も待り
月　春日せハくふちゐ焼そをゐれけもこりれり我もこもれり
詞花　古今ハ春めきふり三よ鶯みちきがゐをくきみちあり
風雅　音ちれゝきけばひゐ一郎ちちくくちをゐちふんあり

五月雨　山彼れらハちよ少き峯れ花　有風
是ハこゝれ花山ゐれふちぽ少きと切り

五月雨　花のちり嶋織ゐも人れ紙ざりき　秋村

るまき

糸落くせふもがさをすそのせてき　　厳阿

●それをざるハ

●鄙られて云ふをみ明と森覚ホし●

是ハ鄙らとハふべきをるるとのじふて留るるハとゝのそびあのくりを　るるとのじまて留る例なし　けるとき残ぎとるるとのじハ上あよりくる時ハるとのぎ上より　ぞのや　疑ホまてかる時ハるとなじと心べし

拾遺
みぬ人のくゝもがてゝハ折ざりき心みなぞらへる花もし何らねど

是ハ劣まなぞらへる花もし何らねどこみぬ人のくこがてゝハ折ざりきと切らまく

万葉
うつりふし人を忘らとめぬおもれその夜ハ忘れじいも待ちてき

古今
かきくもれんのやさふおびひさき恋らてとハせん人さざめよ

拾遺
風ふしも何かまつせん桜花白ひ何かぬまちるハかかりき

けるとのぎハけりの之しあれバけりといへんよ一字何まる時　あらき　あらき　見き　あどいふ之

志らるま元禄の頃まハるとのぎまて切れるる発句ハ之まぢるとのぎまて留べき所をもけりといへり

「祐成鞍を喰ふときも時宗ハ喰ざりけり

といふ句ありてれらハ喰ざりきといふべきを字何かなくけりといへるハ吟まきづらかなし

現在し
そのいへバ唇寒し秋の風　　はせを

是ハ秋の風ありいへバ唇さむしと切るり

現在し
我もちて手折れバ淋し女郎花　　蓼太

是ハをさなし秋とのまたをれバさびしと切るり

現在し
卯れ花よけし宿の八朱黒し　　白猿

現在し
大原宗之るま樫し寒き紅　　暁山

是ハくんの通ぎ大原宗徳まさうしと切るり

現在し
秋さびし竹のまれおふ者ばかり　　小田　南街

見ハ竹のもれあふ音も秋さびて　和うり

現五〜　もれ聞て南さがしきほと狂さび　猛考

現五〜　花ぞ〜清水山ぞる夕月夜　雨竹

見ハ志ぐ山ぞる夕月夜花ぞ〜と切うり

現五〜　行春を埋ひとく物もかし　也有

見ハ門の松月花のためもむ〜と切うり　玄来

現五〜　月光のあるも〜門の松

現五〜　秋栗は笑ふもさびし　秋社山　李由

見ハ秋の山いが栗のふ〜ふ〜と切うり

現五〜　くれあるもかく〜てはさびし　蔦風　蓼太

見ハ〜ふ風紅のもみ〜てはさびしと切うり

現五〜　帳もれ孫びひやそ〜　残雪面　古考

見ハ孫びひやそ〜と切うり

現五〜　山里ハ年歳遠し　梅花　蓼成

見ハ梅は花山さくぶ万歳遠し〜と切うり

現五〜　京小森て残雪月遠し　菓の煙　月

これハ菓の煙京小森て残雪月遠し〜と切うり

ぴ白ミハ旅宿小夏城ぬし馬上小移りて明ゆく

乃もをぐ〜紀小姫ぐふせ氣小ハ紫形くぶる菓の

煙小ぢ〜ぢ詩さる有明の新りすの小月も遠くる

しいふ〜ミ　劉駕ぐ詩小　上馬續殘夢といふあり

王禹偁ぐ詩おル　赴朝雞呼起殘夢馬駄行

ともあり　これふ〜れうと和もさる

新古今　たれかハとひたてるもりつよみ〜きつれてふく風ハ〜めし

古今　為氏つ多きれる上と〜つ〜り老よ〜〜ふ年きぢ有

ち〜　世中ハ菓搗ぬ〜ぬ友ち根　関夕

[illegible]ハ夜大根よの中パ茶つこ[illegible]と切らう

[illegible] 十月ハ夜を童も思ふ[illegible]　石奴

[illegible] 箱根こえ人もあるらしき鈴の音　[illegible]

[illegible]ハけさ[illegible]をそれこえ人もあるらしと切らう

[illegible] 麦をふれ花よおぐもぬ一番[illegible]　素堂

[illegible] 月雪[illegible]のさむ[illegible]ぐりけらし身[illegible]　[illegible]

[illegible]ハ[illegible]れ月雪[illegible]のさむ[illegible]ぐりけ[illegible]と切らう　[illegible]

かゝる時のけら[illegible]ハけ[illegible]と切らう　[illegible]

[illegible] そのうみハ谷蹄ありけらし小秋蹄　[illegible]

[illegible]ハ小夜蹄[illegible]ハ谷蹄あり[illegible]と切らう

古今　花のごと世のつゝあるべ[illegible]てしむらしハ又もうつり来あり

[illegible]　世中[illegible]と思へて桜のかゝるうせ[illegible]のゝけ[illegible]

立田川[illegible]紅葉を[illegible]外ひびれこむ[illegible]の山よ時雨[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]ハ白妙乃[illegible]衣[illegible]てふ天の[illegible]山[illegible]

[illegible]と[illegible]

[illegible]

外 十八十九二十の格

第二十　累清も花見の座よハ七を清

[illegible]ハ[illegible]のうく七[illegible]と[illegible]

下へ[illegible]と二字入て[illegible]二十の格く

第十九　送られつ送りつゝ末[illegible]秋

[illegible]ハ送られつ送りつと切り格をうく[illegible]れ[illegible]打下へつゞきて

秋と[illegible]下へ[illegible]ハ[illegible]の[illegible]

[illegible]日を[illegible]年月を送る[illegible]

[illegible]の[illegible]を[illegible]

りなれば[illegible]と二字入て第十九の格く

外十九　七夕　又くり返し同じ事　枕風

是ハ糸と為り〳〵る下へいぶと二字入てふとてふを八枝
合て廿文字にて十九の格こ

外十九　雲雨　雲もるゝと為り〳〵る下へ雨のくりあれバ雨ぶと二字入
てりとてふをそを合て廿文字にて十九の格こ　北夜

外十九　いつくふた　是ハいづくと数の行をあぶと定る格にて むらびて切る
をとゝを交て下へつけくる時ハ是ハ列を略るあれバ いづくふた
白ハ曾良 ふれ ふたゝる萩の葉ぶと為り〳〵る下へ ふぶと二字入て
ふと為り〳〵る下へ ふぶと二字入て 枝を合て
ゆゝをふて十九の格こ

外十九　本当に煙　ゆゝ後の月　左武
是ハ月と為り〳〵る下へ月ぶと二字入て廿文字にて十九の格こ

外十九　雑水の名　是ハ名と為り〳〵る下へあぶと二字入てりと合てきく十九格こ　其角

外十八　よし野山　又十九字有ちなる迫　芭蕉
是ハ迫と為り〳〵る下へ野のくりあれバ ちゝ一字ハ十八字にて
十八の格こ　その野鹿ホの時ハ野ぶと入て格かるあ
あり

外十九　かつる蕨　根ハ深くして藤北郭　吐月
是ハ蕨と為り〳〵る下へさぶと二字入て廿文字にて十九の格こ

外十九　夕蕎麦　こてゝゝて初時雨　柳川
是ハ麦と為り〳〵る下へふると二字入て廿文字にて十九の格こ

外十九　省戸の畑　茅ぶるみて菊　且臺
是ハ茅と為り〳〵る下へふぶと二字入て廿文字にて十九の格こ

外十　夏社月　故を庭まして石西　其角
是ハ石と為り〳〵る下へ石ぶと三字入て廿文字にて二十の格こ

外二十
いざさらバ雪見にころぶ所迄　はせを
是ハ迄と留りたる所へ所ぐんと三字入て字あまり二十の格之

外十九
憎まれてながらふる人冬乃蠅　其角
是ハ人といふ字よりかくりの所が所のかりと蠅と留りたる所へなりと二字入て字あまり十九の格之

外十八
杣が食をしてくふて探り狩。　作者不知
是ハさくら格と留りたる下へをと一字入て字あまりて十八の格之

外十八
客人に見物させてくまり喰。　禅桃
是も喰と留りたる下へをと一字入て字あまりて十八の格之

外十九
眉掃哉おもかげにして紅の花。　はせを
是ハでよりかりて花と留りたる所へ「さぐ」と二字入て「ぐ」と云字をそへ字あまりて十九の格之 志りかふ此句をとらひ学びのともがら十八の格として此下へやと一字入て此字を入るときハ例なきなり

俳諧秘記の中にみの句の語へ一字二字入て字あまりて無心の切とのみと有

● 眉掃を俤にしてや紅の花

といへる時ハてやとうけびのやを花と動かぬ詞にてむすぶまて花と留りたる下へ又詞を添て字あまりにくびのやを添ふといふ二八例もあしくとらりあし不及ひが言ふ是ハやとのといへバ切まとのしとひてものがまうるやとかハバようらんと何の差別もなく切とせる物とおりもる其八上へ何としていふ言を加へて字を志る事あるとおしくんぬてつゞく字のあるへ切と入るハてふちそ此そのひをさへぬ人のいふづくこともあるべし

何として　と詞を加へて字あまりを志るハいてお有り

古今
久かたの光のどけき春の日に志づ心なく花のちるらん
是ハ紀友則の歌の事
是ハ刻ほとてといふ詞を添て字あまりを知るべけんなれ
とハ久かたの光りのどけき春の日に志づ心なく
花のちる事何として志づ心なく花のちるらんと
いふことくされハ詞を入てきく所さぶなれば

新古今
まてどくるたのめぬ人をまつほどにこのうちおくまで人のわすらん 是も句ちがひに

是もおなじ同じけれども句を入て味ふべし
けりなまうらみんハいまひし けりけ六帖十八

よそながらあるべきものをいかにせん人の行べき

とふべきわけもあらぬ人ゆゑにわかるゝ けりなひの
上へ句を合せてみると十八十九二十の格の一かたに三
字をも限りてかける外の定りであるから別なり

外十九

目には青葉山ほとゝぎす初鰹　素堂

是ハ目にハ青葉と山郭公と初鰹といふこと此句ハとく
とくれ句合の左の前え置て句をたてよめれば判の詞あり
左の五文字その字あそびとも目に青葉耳に郭公
口に初鰹といはでしれるべし
とあればくちにハ初の字を略せり句意ハ卯月の空うらう
らのどけき日和のあつさの見けしきを余情にふくませたり
されば鰹と留るを上へ引かけと二字現在のにたとへ合せて味ふ

十九の格にけり句なかやすといふ類にて三段切とある故に此ばあひの
字ハいふもなかしきやうるハいへれども是らにハ二段
切三段切といふて分るハ分し右の句も切る格を二つかさねた
れども切る格あるうへハつゞきて切る所ハただ一つあり前よ
ハ切る格をいくつもかさねるハつまりておかしかり

古今
君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝか寝てかさめてか

此前切る格を七つまでかれども切るにハたゞ一つ
終句に十八十九二十の格あれハ
いかやうにかれらにも
るれハこれらに
あまりふるへて書つゞ

君やこしとうたがひのやを置て結びて切
我や行けんとうたがひのやをけりんとむすびて切
おもほえずと切
切るとかい四つうかるゝたれども又句のつめにて置
てかと切りかくれてもく切る格をさあれども
切る格あるとハ下へつゞきて切る所ハたゞ一つ

是ほかまなかるゝて切る格さありても上よりかゝり字をさ
だひて詞の末と末とを一つへ合せる時ハ好ひあしと
ん知べし うたがひのや二つあるうちハ

新古今
夜やさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらん

是ハことばのや二ツあり是にてかんがへて知るべし

いひかけてむすぶ格

いひかけ 墨衣袖あらひて早乙女の川　宗養

是ハ墨衣袖あらひてぬれしとむすぶことあるを早乙女の川といひかけてとゝのへり

いひかけ 又たぐひながれ川乃河面鈴　主我

是も又たぐひなかりしとむすぶことあるをながれの川のといひかけてとゝのへり

いひかけ 今よりハ見し花の香も夏衣　後宣

是も見し花の香もなしとむすぶことあるを夏衣といひかけてとゝのへり

いひかけ 市中をのがれて月ハ角田川　西柳

是ものがれて月ハすむとむすぶことあるをすみだ川へいひかけてとゝのへり

いひかけ 芳野山よりみハ道ちかくら　洞月

是もよしのハ道遠しといふことあるを道程へいひかけてとゝのへり

いひかけ いまハひまに暮れ袋をあけ眠巾　主我

是ハ弟ハひまゆくといふことあるを暮のといひかけてとゝのへり此句客来の方をいふなれ京なまハ

弟かひまに暮の袋や暮け眠巾

是なれども弟かひまに暮の袋をといひかけてとゝのへるこのとやとまぐさやうなし此やハ欲息のやなりあくびかひのやにもあらずいかにも切字のやなれバ此句切れたやとよみあらずしていはれるなり人此句切字なしなどいひて後不やとなへるとおかるる此歌ひ二の句つめたあるやまとことのたざるハいかく苦なり是ハ欲息のやハづく句をも交てやと切るを欲息のやをつきて切れしいふくんを付ぐくしてたゞやとのいひバ切れと思ふ由息おのが自由にやを

あつまるを　科あるべし

ひらけまてあそびまるるハ　イミ今ハくみドト首

実際　ものぶれどもいとあぎたのたまや舟波のみけてる人ハくのまゝ

見ハうひもあ。いとあるを　あぎたのようい

うけてもそびあぐ〳〵下へつぎくり

形容　ぜゞをとをむきようてハあり　ぐるれくきこゝハあるゝ系のさと

見し　れくきこゝハあるゝ。といふこゝあるとあるゝ系

のこゝ　いひうけまてもそびより　第ひよりのや

貸ゝ　やといあやまれくり

後拾遺　いつまつ〳〵んこゝある我高ゝ　ふゝれこゝ根よかくるきこゝセ。。。

けやをあ〳〵こゝてそこあこゝこゝぐ〳〵　ぞくこゝさ

ぐひの中をこゝごゝぬ詞まて　ぞゝもそびて下へあん

と三字入てゆこゝこゝれくれやをかう〳〵てもそと

いゝて下へ出して　和意ハゝれくこゝあるくる白ぞ

かとこゝる時ハこゝ　ゝ　ぞびみくこゝぐひの中あること

はゝ　ぞあ

うあ行部

ゝとハぞ　ゝや　ゝこと　ゝこと

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

の外

遠山ゝ行ゝ〳〵ばゝ　宗祇

あつまきよし行を叩く住居系　ぞ紙

知ゝ人小あゝ　ゝ　ゝ　ゝ　玄東

早ゝ女ゝ〳〵ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　嵐雪

ぞゝゝゝ三百月ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　素堂

二日月ハ梅よ　ゝ　ゝ　ゝ　不角

よゝ中ハ三日ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉太

上ちりぞやぬぎこそかすりうる時引ふと留りうる例あり
ぞもやも數もこそもそもむもびそれば下ハ
の外ぬりうりあて引ふ引つもいそうく

の　煙やたくふごれる京の流れかな　梅洞

是ハうくびのやをくぐとむもびれバのうりてうふと
留りうりけ留白を河乃そ尾とつよ字年の中ゐ
口侍よ云格よ立る又文字ふれバ上よ切字あり
てもうふと留るく
うれぐも後ゑ立るゐ文字ありとても立やうよりて
引ふとハ留ぐふこと行りたくバ引くたくゐと所ハ
引ふくふ留ふ千所ハ引ふ京のあぐれあるとつぐ
まバくくのそびたび上よりけうりよちぐびて引ぞもや
も數もこそもそもむもびゐあてむもびれバ下ハの
外のりりあて引ふもつもいそうとんりうりハそこ
ちひな

文う東やとき花やなきと学ぶとうん学ぶもなうびむあうれ

こかくくあぐくくてんけべ
逆ひつあれかくく法のむ学うれ　流水
うこのくく来てハ花又の留ちれ　丈竹
外菜大根ちよ冷食つく宝きう　乙州
の乃たうふ函賀又のそ岳の宝これ　尚白
の切秋をぶうりと坂懸れ釣ち彩　中邦
外変の移れくきをうやむ角う船　洛々
外妻ゑ穂をたよりふつうむ別ろ　玉英
是ホのくくやむつうむ　ぬのむぬハつよ切れもつぎく
ちる格よて六けやのくくもつふむるれくちく
外　山吹ち巴ちいでく田植の郷　許六

〃　燃る系〻四〳〵ばゆる敷きる乱　木阿

〃　梅柳さとる流系女一の那　十七

けゞ今年初まい

●梅柳さそてる流系女久那

と行り冨むの方ハさをとありて正一さそとつゝ河ハ

推量のもこと上より推量の頂りりとりてハ久系と為

らぎ　推量の行上なあてもきもまびあれバ下ハの

〃のかゝりるこ久系ともいるる久

ゑ義　是もこゝ系さそ系むりれちきりそと思ふ拾りこ行さまきくあ

是ハ二重よゝ〻のる系ゝ行そハ切るゝぞをそと

交て下へつゞけゝり上のさそ系のをハ思ふとい

述へゝりてをハゝらぬ拾るゝと交て下へつゞき

てゝ系けをハあひ思らぬハ系世のちぎりぞと系

んをゝぐさあてもれはるゝきこゝ乱しるをこ

右の考自然さそハ毛文字の上ゝ書るもて付てゝ正一を

ごと思ちぐてさそとゝ字一誤りゝるゝあり

〃　水底をとゝんてゝ弟〻新の小野ゝ系　丈卿

〃　高燒蕨を思ハをのゝきゝ柱ゝの那　千那

〃　金入ゝ〻冬をうゝつゞむ樹ゝの系　曲翠

〃　故懸つゝん法〻ゞと一欲二重乱　六窓

〃　是森して手付動きやむ園府系　枚風

〃　淋ゝさハ東系思をうけゝる巨燈ゝな　桃糸

〃　新新のちゝぬんを女ゝの那　半細

〃　西凡乱ゝり神ゝをもゝぬ朝乱　素堂

〃　井のゝ〻ぱあゝ系なる宰市ゝ系　素下

外　いく秋も弁てのまにたゆる哉　重五

是は句と数句あれともすべて句あれば
句と成りてもそこあひあしけこと葉の新もいつり

の　何のあく極しぶ菓子白きうす　巴丈

是も銘の新よりいるごとく数字のてよごと文字あるも句
ある中を下よりあくもいちくく

住吉参詣
いつよりもうすりなき表の月あれバてるくさまよりうぶきうれ

是ハ句あぞくて新句の下よりも文字をこそ文字を八ぶ
句あれバぞこそや数外系つ。あどよきりてもこ
さうぬ句ありとそうぶべ

の　いく年の白髪も秋乃光うす　玄来

これくもおよ同じ是ハ春あり春白の俗句もいぶせり
又数の新新数の下よりどとゆる句の俗句も春うう又歌句
の句法の俗句のふりもいぶもるも

外　菜ぶ畑よりもうぶき大和河内系　蓼太

外　草枯て隣よりもうぶき野寺系　素阿

の　郊のふをかざしに関のもれ出れ　吉良

叶句ハ竹田樵夫大夫ゲ白河の関をとひとそうりとそうの

外　梅折て加ふ系遊つく白ひう系　盧舟

外　鴨山に月を遊ぶ千鳥うの形　双鯉

外　棹市に日の隈くをもぐみ系　文毋

外　大津絵よ丹のうとうる暑さ哉　蓼太

外　雲に雲石間を挽ぶ取りう系　李由

の　あるんつうぬよ世よる形莫う形　忠知

叶あるはうるさびのゆあぐ〜数のえもたぐあるのんもつ
ぬるとつるとあれば他をゆ数の付くされバ下ゆるふも
いそそそく

風雅
人されもあり〜ハとも〜ものあるひあくなりぬ〜きくか
是もあるよのうひもあくとつふこるれいるさびの
そそもあ〜ぶれバ下ゆるふともいそそく

外 風やちるちる花ゑえぬ一ふ名 宗祇
是ハうるさびのやをちるとむもび河ゑもむもびられバ下る
うふともいそそく

ず 栗やまつやもどうふ夕〜ゆふ 雨遠
叶二ツのやハ新のやそそもあをその拾ハあづうぎ〜ぶ
るをくうゆくるやゑ是ハ何ヤカヤ拾やとうをひうんと
うもの木のゆあて実のあるうのくもひうんとうえんとそ〜ん
栗や松ゑ〜伊のやゆくやひうんふりめ〜ふとうふこあれた
ゆあるもさう〜ぬ新のやと

の 世ふるもさらに宗祇の世ふる宗
叶白ゑゑ〜ゑ白の流句もいぶもり 玉武

の 昔よふるも時雨の宿りふ 宗祇
是ハ世ゑ〜ゑ〜ゑあを拾ゑの家ゑやはゆ〜ゑ五ゆ村時雨
氣とうふゆをとれり付ゑるをとりて

の 昔ふるもさらに宗祇の世ふる宗
叶白ゑゑ〜ゑ白の流句もいぶもり 玉武

の 昔よふるもの紙ゑれ 恵子の那 葱太

外 今朝秋とうを三〜ぶ門掃田男ふ 存義

外 ゑ〜ゑ〜ゑ物あき素家ふ 世ゑ

外 ゑふちり月ゑ河つるをどうれ 為里

三の 雪や月梅形ゑの光りの那 拾栗
是もあゑ月ゑ〜ゑ〜ゑ〜ゑるをうをゑ月ゑ為ゑう
下ハ為〜んと三ゆ入てゑあを度を金たれバ下ハの那ゑ

かりそめ乱れもつゝしむべき事

我 是や爰 つれづれ現れ出る事

是も名所の格と同じくして一の句づゝの句

動詞言の下へ［あり］と三字入て字格へ

や［うた］

句法　歩べて俳諧の句法も秘伝へ云ひ数句

お續のさまゝ上げ来れハ有り

是ハ上まあぶむるやを主として下ハ［の］所ゝ有て［うた］といふ必

二季の時のごとく又季ようなる物もあぶむるやを主ていふ事

ようなるものゝ

國郡　各所　旧跡　故人之名　神佛　月日　年々

あぶむを季ようなるハ故上のやをおくでハ叶ぬといふハあ

らず　あぶむるやハてをを格ようあ故ようの句のもゝ〳〵ぶま

ふるるもしされば二季ある句ハ下を［乱］とやぶ

もあるりあぶむるやハようの句のようよりてのぶりあるとなべし

例　鶴翁　扇の句を始格の事　其角

是ハあるべ扇ハ秋扇ハ夏

例　乱ハ濃や　是ハ故人の名を季ようなること

の　大磯や　砂の見りし暑さ哉　陳曲

是ハ大磯と地名を季ようなること

例　伊吾や　因幡より帰る汐干哉　徳元

是も名所を季ようなること

の　少輔や　秋いろ〳〵ふべ哉　宗因

是も少輔ハ夏　「ふべ秋〳〵」叶句ハ古今　みどりある

つ季ようなる　秋いろ〳〵ふ節をあり名ることを

とれるる　「ふ」と　俳諧の名句のうあるこ

まて句ハあがむるやうぶびのやぞ　こゝ数句ハ

初のなと末をうそ人金の下ハ　［うた］もつ

うたのこと

句

卯　うちはらひ小雪くもりて雪霊舎　水

雪ハ雪霊舎のうちなれどもあるかれのそこのうへ

卯　嵐山ふるでもちるか　荒七日　有風

雪も花と日嵐山ふるでもちるかのそこのうへ

古今　ちるせをれ世をもいかくるう桜ふるさくらみしーるふるちるはげり

雪ハさくらさくらーるふるちるはるう　雪

咲れ世をもいかくるかのそこのうへ

同　流さるかりかけて白雪をまもぬけるまれ　柳

雪もまもぬけるまれの柳ふるのそこのうへ

同　ちるせをれるはるの世をもいかくもはるかれおもしろふ

雪ハ雪のそこのうへ

○　梅がふるさとのがふ　雪ハ雪をふるどりてがるとふ

子日小都へゆうん交もが郷　ちゑ

雪ハのそこのうへ河ハ河ハゆうん交とうきうりまど　うん交どりつまり

こゝをもきるつきもをかれもをそこんべしをひ雪ひ

のそこがハ上ま鶏河う河　こがびのやう又よる引人雪ま

ていたるはれおもるるいども志てハこがるのそこべ

いれの河りかりるも　初雪みくいまるあ雪ま

べ河雪の雪ちるうん雪のうもづくく

ゆくもがふ　初雪よいふのうり　知足

雪ハ上へうちくーてちるうるるうるるるもがふと

雪ちるうう

二雪の陰彼岸桜ちるもがふ　貞徳

温ちるて来るの白ま雪花もがふ　慶我

霜の陰梅子流ちるうん雪もが郷　一言

梅ハ花香ちがふ雪ハ雪ちがふ　紹巴

芙蓉白菊その雪ハ雪ちがふ　嵐雪

[illegible]

[illegible]

て部

て

行春坂麦ハ穂ばらみてゆきて　子雨

[illegible]

て

[illegible]

荷　蓮も何をまゝ稲くゝで乱れて　樂飢

[illegible]

古今

山さとハ秋こそことに侘しけれ　庵のなゝめ[illegible]

[illegible]

て

[illegible]

庵の[illegible]　みどりなりぬ[illegible]　岚雪

見いあげてふよ海ふつて上へ上へとしてゆく雲の
末も絶えまりぬと切りけかく上を切る末を竹で分べし

[illegible] 滝さらいつぶきしつて雲の表系　魚貫

見も出あり　あげられつゝ見ハ待意の白くこれハ白ふの
俳白ふも又系多あり　考る所俳白ふも出せりてこゝてハ
あげられつの俳白ふとなるべし

古人　音羽山系学ぶ　古ウ　坂の関のこれ〳〵ぞある系
叶ごとくつてこハ云ひあれども別あるよハ行のごと
こゝこゝまりて志ゆるゆるこゝをゞ巻よ
つ当となりて俳白ふ

てのこの　雲のうへあり我あを猫乃ぶをれて
とゆれども上ゆまりあり　と切る所あれい
雲情をふゝめて当りくるつゝよハあれ見も
下りうちつゝて我あを猫の見をれて迷
ふありとゆるゝてでゝうふつゝくされを

つ当とつてハなりびとゝるべし　又つハてゝ
よゝども一字〳〵めよゝべゝまれ所てとゝをべきこ
をつゝとゝふひがゝこゝを付よハつハでよ海
ともでハつゝよかゝ〳〵がゝとゝるべし

下知事切り格

よ　うき我をさびゝがせよかんこ書　喜撰
見ハうんこゝりうきゝをさびゝがせよとゝ初事切り

よ　二日月をたゝあて宿代所よ　素堂
見ハうゝゝゝ下初事切り

よ　おもうろく松笠ゝゝよ屋の月夜　士昔
見ハうゝ月東面白ふれうゝよゝと切り

よ　麻苗よ上ゆをつゝ人あゝれよ　樹水
ゝれゝれよハ頼島のゝゝより

よ　冬と牡丹手鞠より雪は鄭公　大江武

是ハ冬ぞかんこのたとへぎにハあるよと切らり叶句と
ある人冬ぞかんあるよ海ハと詞を添てゆうこと
いつれでそれのもと変牡丹の比時もれあけぞ牡丹の
比時をこそいつべきあハ千年よといふこと

古今　萩の露玉よぬかんとそれバけぬよ一ん人いそぐあらしよ

ゆ　ふちもむけ手もさびしき秋の雪　大江武

是ハ手もさびしき秋のれこちもむけと詞を切り
下新なれも下へ手のつきて下よ切ることあるを是
かれなり

若ハ中ゆ[中初三字]ゆよりの人を雪九め

是ハ下よりうちちてゆ若ハ中ゆ雪九めと切るとき
おくをんと切ることを是ハ中ゆ雪九めと切るとき

ひ　肩衣ハ雨ゆゆ雪ゆ老の姿　秋風

是ハ肩衣の雨ゆゆ雪ゆ老の姿と切り

ひ　宮人よ為のあのもちゆ蓬莱川　大江武

叶よハよびうちるを川為のあをちゆ叶句と切り叶句なり

宮人よわが名をもちゆ蓬莱川

宮人よ為の名ハ叶句を蓬莱川と切り叶句なり
新為宮女を為て切りて為の名をもちゆと有
宮女といふハ人ハ宮女ハ人ハ宮女ハ人ハ宮女

元　鶴屋切手本ぞーまて　沐こ紀　こ意紀

是ハ神和歌を切手本ぞーまてと切らう

古今三　やまもまて山ほとゝきすこゑうてんとれ世中よ住まびぬとよ

是ハ[illegible]ぬとよ山ほとゝぎす

こゝぢてんやこゝ市まてと[illegible]やよやの[illegible]

ハ新島のやこゝに[illegible]ハれば[illegible]新島のや

もやよや「いでや「そゝや「いざや「[illegible]や　あどの新ハ

新島のやあれども[illegible]詩をて切れぞ

元　一夜妻てこゝ井者こゝ　初時雨　尚白

是ハ和しぐれひまあまてこゝろこゝぺこ切らう

元　そ細で袖のれ垣むまぐまこゝけ　逸隙

是ハ書こゝげそ細でやれきむまぐと切らう

新書きこゝ[illegible]ぞりこゝてあれざしめ[illegible]ふのひけれけぶるこゝ

元　数尺これ[illegible]ぞりふきこん梅の花　蓉粘

是ハこゝめれぶぞりよれん義こゝれこゝ切らう

元　日をこれぬこゝ　風虎

是ハ女たまぞこゝ日もこれぬこゝ[illegible]ハ[illegible]の[illegible]

二月ハ一月の中こゝ切こゝ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ぞこゝ十七字ふ[illegible]ぞこゝ[illegible]

[illegible]こゝ[illegible]こゝ[illegible]

[illegible]こゝ[illegible]こゝ[illegible]

義　こゝれまこゝぬこゝ

是ハ神のこゝ山桜こゝぶたりまこゝてまぐこゝふこゝ[illegible]

[illegible]こゝ[illegible]こゝ[illegible]

元　こゝぐふ[illegible]こゝ[illegible]の花も浦乃まこ　こ意紀

[illegible]

[illegible]

二日よもぬるりハせゞ[illegible]の春　[illegible]

[illegible]

[illegible]

●そうぢたてざる事
●初さて〜紀をもち〜そ 材葉

汁の重箱乃分注よ六帖 ひげせこがうりさけん
つゝあげ〜らんきよ紀月あるを稱引そ 是ハ
あを畧てもそとのこつりつゝぎひごゝ
下のそい畧る例あれども上のあを畧ることハ
例もこゝ〜ひりをあ〜 叶あハ万葉十よ行りて諸旨
鬢 ナビキ 奠 彫 名引 とゐるを畧る俗りしもべて六帖の
うち万葉のあの有をとれるまハえもいとぬひがことな
ゆきそう〜 一 有

花ぞ ちゝ〜そといひぐき所を紀●こゝ〜ひるゝ〜のそ
柳よ泥ふ おゝ〜そも 〜 是 まそ
是ハ ゐ〜 燕 柳よ 泥ふ ゐ〜そと切ゝう
第 ゐ 水よ 草ふ 柳〜そ 里燕 且ハ 用

是も里つゝめふ草のうよ草あふ〜そと切ゝう
牧ふ〜めふ 分ふ 見ひそ 玉ふ まそ
是もあ中つり牧ふ めふ分ふ見ひそと切ゝう
萩ふ刈 そ 西風まあつ 男 其用
是ハ西風ふ拂ふ風ふ拂ふ そと切ゝう
秋 古今 ち〜 さハいきよ松ふ ふ屋のゝつぶり角あれどそ ふ
夫木 ゐ〜 叶ふ ふ ふ

余情を下ふるまぜる例

そのを　歌

青くてもこのうぐいすとのを風うし　[illegible]

是ハ春ぐるしきまくてもうぐいすとのを余情をふくまもて歌ふり

このをれをこのハ　歌

風を拾るひさごもかるを　[illegible]　嵩雪

是ハまちくるき風をまつるひさごをもとと歌ふり

所詮ちかくの何ぞ人のをもひ時をあるとこてきてあるをのを

是も余情をふくめてをのをとなりふり

いせ和歌

つひふり雨とハくもて少しうどきのふるふとハおもへさりしを

新古今

是ハをのををのををおもて歌ふり

ひとりをれをあがもるりハをこれへ〜あるを拾てをまもを

是もをのををのをとのををて歌ふり

和て　歌

章陵[illegible]松ハ花よりおぼろまて　[illegible]

是ハ下ちを余情をふくめて小てと歌ふりけりをを

おぼろ　歌のをを花ハてとをいくれどけりのををあハ脇系

をるをを花ハ京都れ宮上あれハまてとを花せりと

いひ来ぬをを歌ふりををふ歌てをををををををを

歌てをふ異く歌てハ歌てのをををををを歌く是ハ

例あれハ歌てをを余情をふくめて歌ふり

月清集

花もちぐ咲ぬくるハ山川のうちいづる波をををををを

是もをのををををををををををををて歌ふり又

○ふしてと歌ふり

古今

用やいづくぬをををををををををををををををををををを

是ハふしてと歌ふりてをを余情をふくふり又

○してと歌ふり

万葉 いもとせ海士のたくなわ多あるふくてふおとびの見れくこゝろひて

是も下よりの事情をふくめるなり又

○ゆくゝとゝ曰りくるハ

古今 みちもなくゝなれるものゝまもぎもりくれゆゑまみぐれんと思ふ我ぬ

是ハ別くゝまと事情をふくめて曰りくる又

○まゝ〜ハと曰りくるあり是ハ文字ハ同じてもたゝ

宮ゝまてゝも一日云樣を入てはなるものゝ

枕草 いくぶくゝまるる月日をもたゝの何の数乃数と思ふ

是ハ上よりくるゝ下へくれしかゝりと

一日入てゆくことゝまゝとまゝくゝとハ別こ是ハ

四ゝ〜ハつゞめ何まゝくゝハの〜何ゝけるすハ何の

本来ゝ何の数のゝ〜の所よりゝくゝハ

ゆくゝまりくゝ思ふくゝといふこゝ

○せくゝと曰りくるハ

千載 ゆくゝるこゝて後ぶゝれ家ゝ見くゝ曰りくるハ

是ハ曰りくるゝ下へくれしかゝりまゝ一日

後て中ゝこゝ何ゝをゝくゝて事情ある曰りくるハ

ゝ曰ゝ曰ゝ曰

のそんゆくまぐて余情をふくめて海るも和歌れ
例を以てまぐし自由ふおのがちふいひおほせ
されハ素堂ハ京の例をいて へと海る歌句あり これハ
十九の格ふ同しるそ

蓮の実よりそもゝ葉ふ唐澤へ　ハ　素堂

見ハへと海りくる下ハとへと二字ふ於余情へ　これくハ
歌句ふも京ふもいくくめくくしきなりく

能因法師の云々集よ

任なくく京ふのぐるは多ふ於の社まて
五くせハ志るしよ於ふつくてきゝ　くくまハ梅ふ花のくやこへふ
見ハよるよ　てきと切ふ格ふれども花ハ於下へつゞ
きてくくハ於れ花のこゝこへと海るくと見ふ
も明へと云ふ二字ふ於余情へ

古今

今ばくふふふへきくふおりふ花ハをもくくしてりさせりて
此へハ　とゝとふおそて切くをまて別なりけ
でハとゝいの反乃ちゝ於でふくくせくるて

正親句　句法

四月中の酉日加茂の社奉納

祭ふを冠にくくやあふひ草　了阿
ま　た　や　あ　さ

是ハ通類を六字句の於と句つゝへ亜を正親句と
ふくこれも下より上へくちくへして
あふひをさすつりふハくふりふくや
と切くやふて切くり於格ハ神祇を納又ハ祝言
賀ふふ

ま	た	や	あ	さ

此ごくく　ア加サタナハマヤラワ　於十字のすゝ　ふて
六字句のくくとムと句つゝへ　五十字額の横
十字於中いづれの反ふても六字くぐるを正
親句といふく

親句

句法

代〇下の字へ五十顔横十字の中 ゑそも竪五字の中 ゑそも三字句既へ ゑを親句とする

の 神や宮や(あ)葉桂の花(ぬ)ぬさおせん　柿栗

是ハ竪五字十二文字。ゑそもちを三字句のうらへ むきひたり

い いく年も白髮も神のひろりかな　玄恭

① ② 是ハ横十字仁キ。チニヒミイリ井 の井を三字句の ゝ〜らへむきびゝらり句法ハけこと〜くちらしども神祇を祝吉賀ホ ふせひ親句ホせるといふハあゝ跡句て

親句ハ二ツ〜れりとゝ い常ハ句既りまそもそうゐゝ
又い変句を ゑ事ホ ゝ 多句ハ洗句ホもいゝやり
〇ある人婚礼の祝の多句ハ切字ホ入う口伝ゝとゝ ゝ
ゝべてゝゝゝの字を切字ゝ ゝ ゝ

たとへば げり をとゝけよげハ上ちれば父なりハアあれば
母字よて父なれげを母字なれり ハある二版一あゞれば
母字稀ハ父字とゝ切 金石ぎく 元を反字とをされば げ
りハとをなれば五字のきとつゝ三字反とつふハ三字あを
ゝをゝ時ゝたとへばぐゝらむ ゝらむ ゝを二字反字をれハぐゝら
ゝ反字 ゝらし けゝと むゝ をゝとゝせバ ぐゝと一字ゝつゞまるゝ
されば

骨掃をおもゞけ下て紅の花

花ハ上字ゝ ゝるゝ ゝ十九の格ゝて花と字ゝ ゝるゝ（さく）
と二字ゝへて字ゝゝあるゝ けゝ句ゝゝてハさゝと係るゝ は
ゝらん ゝゝのゝ ゝ又

ゝるゝき根ハよゝふゝて蒜の芽（さく）

花も同ゝ十九の格ゝゝ けゝ句ゝゝハたゝ さゝとゝのゝゝふゝゝ
ゝ句ゝゝより差別あゝゝとゝゝ

○竪入字のゝちよ父字ゝ
母字よりなる時ハ母字ゝ
反字ゝ ゝし 母字 初ゝ字
ゝ ゝ

○横二字の中ゝる父字ゝ
母字よりあの時ハ父字と
反字ゝ ゝ父字 初ゝ
ゝとなりゝねバゝ

○二重反ハ三字ゝ

○三重かゝ一ゝハ四字ゝ
二字反も三字反も一反
ゝ ゝ ゝあり上字
ゝ ゝ一反ゝ ゝ
同ゝ ゝ

初版	わ	ら	や	ま	た	ふ	た	さ	う	あ
二版	ゐ	り	い	み	ち	ひ	ち	し	き	い
三版	う	る	ゆ	む	つ	ふ	つ	す	く	う
四版	ゑ	れ	え	め	て	へ	て	せ	け	え
五版	を	ろ	よ	も		ほ		そ	こ	お

上のくりふりて【て】を二字ふいちんとあらバ「きつとまべし」
上のくりよりて【き】を二字よいちんとあらバ「しつとまべし」
上のくりよりて【つ】を二字よいちんとあらバ「ちつとまべし」
上のくりよりて【ぬ】を二字ふいちんとあらバ「ねつとまべし」
上のくりふりて【ふ】を二字よいちんとあらバ「へつとまべし」
上のくりふりて【む】を二字ふいちんとあらバ「みつとまべし」
上のくりよりて【ゆ】を二字よいちんとあらバ「えつとまべし」
上のくりふりて【る】を二字ふいちんとあらバ「れつとまべし」

○歌よのべ詞づかひ

んゆうてそをとるべしとよべバ

古人の秋萩も多つまめれバきりしぬるゆゑ

けふしきしきと寄りくるまハきりくをとひやれハ
多ゆめごとくやうろハうあしらぐき とゆうとうれ
ばうろべきのうをのきく三をゑハ「がるの及ぐぐ」
及けゆはきれ及きしかうづやうるきとうろ

愛白ゆも

「名月や小國日和さくわあきい」

是ハめやおそこのうこがひれやまてゆのきいうこがひのやて
むそびこ是もうるべきおそうのきこけうハ中の終乃住をうま
つぶせうヌ

上のうれけうりよちうこがひて中ゑもちるゑもむちぶゆうよ
としてハ一字ゑうぶハしつづくもちぶく

「ちひ森の尾よ蛇もしつ猫の哀」

これくハ和よりうらて蛇もそくいひてハ一字たくぶれバ
いつくいうりしつの及もそく蛇ぞくいくバちるくもちぶ格こ
是ちるゑぶくくて「ふこもへつくも ちくも しつくも ゆくう
えつくも おくうる。くも 第の「れつくもよふふよりて格の
定りこうる。ちあくを「ゆ」へ

彩吉今

歌人ちれたのべふあくぐれてあがくくく

無季の發句　句法

季のない発句はそのひざまずいて居るも春とせえ居るも秋とせえ いろいろ考えて見るとやはりそうなる

も笑とせえ いろいろ秋とせえ いろいろ考えて見るとやはりそうなる

又季のようなるものなれば無季の発句は無くてもよろしい

季のようなるよのくハ　國名　郡名　名所　旧跡　故人　名　神佛　年

季ごとに季のようなるもの

いく年ぞ白髮も神の光哉　玄末

此つゝ髮迄ハ下まも久家にゐたごとくであれば髮白

かくもくばされバ下ふりもの　をもくこれらハ神しつ

を季のようなるもの

物かしや貸ぬ中の月と花　大江

花ハ貸の年ぬ月と花ばかりしやのと歌集のやうに切

ちられくハ貸の中ハ月と花とつを季ふくさ

月花の景やまてくれあるて達　大江

此やはうるさいのやくぬの言ひて達と為りるて（ひるる）

二字入てるとてをを金とはすれの格く花ハ月花に

あるが達あるといるが故人の名ハつくれども智人の要に計

てはるが達と云るが季ようるとまゆ

歩行あるくバ杖つき坂を落るあ　大江

花ハつくれば杖を季ようるくれども言ハ

しるものをとゝふ辞をふくめて歩行あるくバよろしく

あを杖つき坂といかことのをてるものりて為るを季ようる

とゝふことくらバ辞をふくめたるなハ

陰於遠山の淡れくらもの。ばれども月ハうくれざりう

ようまり

花も分まりくバとも十八月ようるまりとゝ

辞をふくまて池みおいれども月ハうくれざり

うら山の岩のくらまもしらばかりらまもしとうふ
立之ちぐてらまもしばとうふ詩ハらばをのべ
たるうら梁之ふらまもしうち四字を三辛反ふ
ちれバらしとでまるを下ちばを衣てらバマ
あるもう

あふとおもく芝吹風もいのちれあり。　松風

花ハいろふル秋のけしきをたづるやう山思る上の紅
うでハとふ思ふ字あれハたゞ詩ちれハちのむすびあるを乃
ふ知らう出てりと知らう

池さしのぶらさしつ麻姑歌弓　鬼貫

花ハ題ハ待意の白くこれらもいろもその表とゆゆ
でハおりとりまるうちうてくちべてつとうふ詩ハ池さしと
あぶらさしつとうふつをたづみてでとうふと安べし

物の名

花ハ岩てい神ちるふ

こ芳みをさて入ふちるる白

手枝を足よ志の田ち歌の友ふ立　空山

花ハ志のふの表の友ふ立あをを足よとと下初ち切ら

立田川をたていれふちる白

鶯ハふつ雪ハ花ちりあさ嵐　後京

花ハ知あしかもハさたハそれちりとふ切ら

あふ祢のこやしろ

於芭物名

まもふまもこふみどう雪ふ子せりをあらふ祢のこや志ろくこ面らん

あしらあ

日

津の國の難波ちこふつる面ハあしらあ人と元元足ちる

廻文歌白

村萩ハ風も吹こそ萩をちん　寶山

漢土名所ちらぶ紅ちらし花の咲　円

廻文の歌白似りやすハちらき碁石へ假名をかき
中の一字ハ紙へ書て表方同字を八つ、並て才
を　を　の　の　さ　さ　も　も
此歌ひをつくるも考へ並て表方同字を並べ
又合て作るべしさて詠めてもえこれそのひを
改むべし中の二字ハ歌林良材ニ有

ム ラ ヲ ヤ ハ カ セ モ ノ モ セ カ ハ キ ヲ ラ ム

○上ふあけこうてふを波の格歌白ふあるハ結ぶおせろ句
ふハけかうふもくさくれ格あれとも歌白ハ詞みしきものゆえ
いひうこれ格ハ俗白ふ　分ハ詞おぎゆえ二字ふそのゝ格
あれも歌白ふハこうぶ二字ふそのふとハ
中務集
花をこそ人やをるこてこがめしの敷あるを花をいろふかハせちん
此こそのきハしりをえかりちらふ結ひのやをる。と詠び
て切れハ。と文てこうてきて二字ふそのゝり此格ハ文章ふ
毎ほう伊勢物語ふ　ぞのきのちんとそと二字ふそのゝるハ
こ郎ありるふちん　見ハぞのきれ清男ぞめてうんとあるこるこ
見ハぞれきのちんちれハてふむきび辞ある格へもおふ同ド
格ふて二字ふそのゝりハきべてこ字ふんを
ほくべし幼住唐の記ふ書ふる此格あり
古写本の方ハ

賢愚文質のひとしからぬもいづれも幼の栖あるべきなり。さひ
枝てふしぬ　と詠り是ハ定る格をとり文て
下へつゞきて外れかゝりあれハぬと云ふ又下句の方ハ
いづれも幼の栖あるべきなり　是ハ文章のゆるりあれハ
とあり是ハ二字ふるのゝ　べき格あるにぬ　ゆるるハ変格と文章ハ下へはゞるるハ
変格なれども是ハ文章ハ弱りあれハぬるといふるもの
なぬとあるハ。文字をふるほ人たゞすなり
ニ字ふるのゝ変白ハくざれハ字あてえき
○去年ハ小先師曰去年切字ハ四十七字皆切字と
用ゆるハ一字も切字あるとおもひ是ハいとゞきこゝを深く
ふるてゝてゝをとゝとゝ　をさらさんとの戯言と和ぬ言
あて皆ゆるも十八十九二十ハ格あれハそのゝを初そうしたゞ
切字のとつふハ

く　ものつまぬふむゆるり　去年　次五

とんぢべかくおもゝこゝをいくさびもいへるハてふをはのゝ
をはゝせんゝあゝおのれもいとめるゝ時ハ言中菴葵太
子知亭吐月が門小拾びてむが言のゝいひて下句を彼乃
ゝのひを魚改とあゝそひこゝをいちきそほハ中級てそ的
あゝそひこゝを見へだゝるおのれが誤りあるこゝを御
四年余うてゝ有りおのれが恥を今ゝふへるハゝあ人の
おゝうをゝをゝをゝめんがたゝなりれゝりをゝみ仕よきハ
ゝ人の病ひあるゝのゝそれ病ひある人ハそのゝくゝられるをゝば
友とゝゝゝられゝりおゝられるゝのを友とゝられゝばゝたゞひのゝ
おゝゝて誤り城あゝゝもゝこゝゝて孫よハ老ぬ略の書ハ義
心集の序ふんの乃師とゝあゝも心を師とゝるゝたゝなゝれと
有是を用ゝ然ゝを病ひも年ゝふ去ゝべきこゝふ有ゝて小
を改ゝゝのひも未集ゝ仕しとゝゝ紙いそぎるや　了

ありふれバ大和歌が戯言もとうるべし弘ふ未来ときを
そ〻をふこそいと〳〵をあ集〻いまとハあり
○初学ハとも〻〻者句ハ考る時始る歌をんなりてて示たて
ハ此ハおのつ〻そ〻それる〻めあれバんなかく〻べたぐふ文字に
二ふ字へてセ文字ふ也一セ文字を二文字ふとして五文字ふ
也一一の句と三ハ句を入くく〻ちくべ〻ハ陽よ紀やゝま作る
べし食業集ふ

四字　三字　三字　四字

あ〻こもふ玉ちる庭の菅まつ〻ハ人ふ知まれけり紀を

是ハ歌まのけしきを人ふ知せ〻やとも〻ハ〻るをかく四字三字
三字四字ふいつるもちく〻さ句ふ〻ハりてと付格建仁三年閏九月
仙洞句合又月清集ふもハれる紀ハ伸さて歌句ふ〻りて
ハふてふをそ乃〻そのひを改むべし又二の句ハ七文字の句
つあをでといふこ〻ありふ〻く〻
祝ふかく紀めハ人せて花撰。ヒロル。

是ハ十九紀格くけごとく二の句づゆをでとゆくバ切れぎ〻して
下へ続く〻こ〻あるものなり歌ハ〻べきハをもでとく〻ふ
〻のひゆめる句もいく〻おほり川て明て〻と学る句ハ〻の
例を以てそ〻そ〻下よ条情をふ〻まて学る〻うのて
ぐ上へ続く〻んと思ひて二の句つめ紀でといふるハ〻るもなる紀
二の句づゆでよりかりて初ぬ言ふて学る〻ハ〻そ〻より
て用格差別あるべし〻ハづく〻うふて切〻〻ふハ〻べ
○やハ終句のをまつきて切の〻ハといふをあるハ切れ〻も歌
句のをもあ〻ざるふおのがまた〻ハと切らんをどいふハひが
こ〻〻又ハ〻切きハをやといふも例を〻ちるふ紀俱
九〻〻せあまりあ〻〻あされハ今人の妨ひい今人の俱よ
ハ〻ハ〻〻〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ

○あゝ人てふを改口伝の哉書といふ抱を又に中ふ七つの
やとふあり又詞は首尾といふとめ行り是ゐも七つのやとふ
ありて他句ハ五句と附句の詞は中ふのゝ長短ふ行く
ふ行ふハてと第る事と第りとつゝを志るせりやハ疑ひの
やと雑のやとふいろくの名をつけり五方は名ぐて又を

哉書　口合のや　又やゝん老の春は花あれも見ん
詞首尾　口合のや　水やのむち用ゐるて源し紀ふ
ひやハ五句の切字ゐも成平句のらんと第ふ時も
よゝてとも第ふ

と有是ハ二句共ふ疑ひのやゐて五句絶び詞ゐてむ志びて切り
哉書の方ハ疑ひのやを又ん　とむ志びて五ハあ志もゝんと第の
ゝり第ゝんと切ゝり　詞の尾は方ハ下より上へゝちゝゝし
去用ゐるて添ゝきふ水やのむと切ゝり又五句は切字ふも
成とあれども切やハ上ふいゝるゝ切字を上ふ更てやとつふ
ゐれハ切やと疑ひのやゝハ別ゝ又てもゐも第ゝんとあるハ

附句の時疑ひのやをむ志び詞ゐて絶びゝれハ下ハいゝゝ
いゝゝれハてとも第ふとつゝとあるべし

哉書　切や　数寄や岩ふつれて迷ふら
詞尾　切や　お稲の穂や志ぎ紀て茎の波ゝ
ひやと上ふあゝ時ハでとも第ふ

と有これハ切ゝやふハあゝ尾二句ともふ疑ひのやゐれバ下は疑ん
むゐびて切ゝり　詞の尾の方ハやは重ふたゞり　お稲乃穂
をゝゝゝふとふハあゝ尾志ぎ紀て茎の波ゝのこゝぎる紀疑ゝ
なれバ　お稲の穂ハ志ぎ紀て茎や波ゝらんといふべきやあり
又てとも第ふとも第ゝ尾とあるハゝたゞひのやゐれバゝ

哉書　拵や　かくしても方のあるべきと思ひきや
詞尾　拵や　平泉あぢろの月は拵しぬや

と有哉書の方のゝ去のきハ切ゝ格ゐを上ふ更てやとい
バ切ゝゝや出て志べて思ひきやとあゝハゝ志ゝゝ之のゝ
やハ詞を第ゝ尾の方ハ尾ゐ紀疑ゝ

相模のやうなと敷島のやまとて切るべし

詞之尾　鈴ひのや　けやけしふある　けうとくやあるや室ふそ梅をとあつえん
　　家やあくらん又うたぐひ梅るやあり　秋あるせとや
　　世もとまれとやの新ひと

と有　世も書の方ハ鈴ひのやけ他白あり　詞の之尾の方ハ
鈴ひのやとそ　一ツ　むすび詞ありてらんとあこ留さふ例
も有　こゝろうふるふひごとと又うたぐひ梅るやあり
神あるせとや　世もとまれとやの新ひとあれども文章
ふハ　ものをふよりて詞のこゝろ郎とのびるるあるの志べざ
ゐて　とや思ふ　ふやあるん　といふをも　とや　ふやちをを
のこゝてらるるあれども　所ふこゝひ梅るふハあり　むすべて
下あふて　神あるせ　こゝろ呂れと切る詰をとゝ文てゝとと
いへるハやの　やふ　神をふて鈴島のやまて切るゝやと　所ふ
所ふやいやとやと　といへるハ人やるゝ　とふゝるを　こゝふるゝ世

て下へつゞるハあれとも鈴ひまるやハ例あり
子義　高ひくてゝひもあるさの沖つ波せてハやそたちこれとや
世ハこれと下知ふて切るゝ　所ふてやと鈴島のやまて切る

世書　腰のや
詞之尾　腰のや
世ハ九やゝもいりてとも　ふもあるこ

かゝで又んあるこや花の様こ府
不孝あるんあ人であゝぎん

世ハ二句ともに鈴ひのやあれハ下ふむすび詞ある格こ世書乃
方ハ　ふゝこや花のさくらんといふをあるを梅麻いひうけ
ふてそのゝり　詞之着尾の方ハ　ふやとゝさぐひのや　世　らんと
むすびて　ふゝり又でとも　ふもあることあるハ鈴ひのやの下
をむすび詞ふて　むすびて下ふハいるゝ　ふもいてゝれハ附白
の時　所ふゝをてゝも　ふもあるこいをとあるべれども
差別を考きばれハいと世へふゝ

世書　中のや
詞之尾　中のや

考久るゝやゝ　辰小日のへて
ゝを務祝や　楢　小考ゝて

けや櫻や櫻とたゞしきあをやの字ふて
たさみへるれハたさらやともいへりてともふ
ふとも学ふと

と有也ハ二句ともふ同一体句之けの中のやハ ふの字の上、

ヤ何ヤカモ　ヤ何ヤカヤ　といふ里語を入れて

今ふる雨や雲　ヤ何ヤカモ　ふ日の入て
雪を指櫻や櫻　ヤ何ヤカヤ　ふ雪ふて
とんる時ハ雜のやけ立も学へ安〜

学書　ハのや　今ハたやとそ〜と同ふ名ふて
詞ヲ尾　ハのや　さら〜雨ハふれと田舎ふて
二句　けや　雨ハ八日の清学て

と有学書の方ハ今ハたやとそ〜と同ふ名ふて
雨ハ八日の清学ふ

ふ雨ハ八〜ぬやこ〜ふ雨ふ不及　詞ヲ尾の方ハ学ふ
ふもよびもけやふもいひて　新のやふれハ切字
ふやこ〜ふ雨ハ下ハいふやふ雨ふれハてもふ

いふこ〜ふれハ雨ふ雨ふのこ〜ふ句ふるべし　けの句ふれ
ふ〜ふ雨ふ　櫻ふ雨ふ　櫻ふ雨ふ　これハ切字
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふれ雨ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ

学書　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
詞ヲ尾　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ

と有　学書の方も詞ヲ尾の方も　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ
ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ　ふ〜ふ雨ふ

たのもしきものや此詞句も「ゆふ」と「ゆふ」とありしをやと
写し誤れるものか

世書　そのや　志賀の浦や老蘇る舟のこゞ初て

と有初句首尾の方ふそのやとつゞかハ有しやハハのやの
詞句と同しやこゝ志ゞの浦やさゞ波や琵琶江やはら〳〵ふや
の彫ひハあゞ乱るや雑のやあり立ぐあゞめ志そく切をさる
やこゝ是ハも切る不あり是近詞句ありて書不

たゞ句ともゆて動無有べし又上ふやとゝ行てとと
当るあハと文字ふて押へ長を当るこ上ようり
三つあハ口合のや四つあハ長きものや又つあハハのや疑ひのや
切やこゝハつあハ中のや九つあハ中のや十七あハ指やこ
中のやハ大きこやもいこ秘せべしく

と有これこハせるくんぢこるこ志べていくつやと張れる
ものふあるこ志こるこふたりてハいづれの形あるやといふべきこ
これるの彫ひの物物も志ゞ志ゞあハ詞句も所しく分ぢ也正

しくこと詞ゞて志ゞるあるこ志べりれども年ゞ志ゞるれ
ゆゞ秘こ写し誤り侍り抜きを基ち書くふハたゞ秘志べき
志ゞ〳〵ゆふふ志ゞ〳〵ゆふかこゞ〳〵ゆふ詞の志ゞ志て
志ゞるをさくいこゞ〳〵ひふハるくこゞるあるこ志ゞ
こゞるこ志ゞ〳〵ゆふ詞句をも入るこ分ぢふいふべき
こゞるこ志ゞ〳〵ゆふハ志ゞ〳〵ゆふハ志ゞ〳〵ゆふハ志ゞ〳〵ゆふ訓志ゞ〳〵
詞句ふいづれるあるもの志ゞ〳〵ハ初学ひの志ゞ〳〵
つゞるこ志ゞきこのふあるこ志ゞ〳〵ゆふ志ゞ〳〵ひもあるべきこのこ
こゞふを歌のこゞの歌も志ゞ人も志ゞこゞ楽し記を
ゆゞ〳〵ゆふこゞ〳〵ゆふこゞ〳〵ゆふ志ゞ〳〵ゆふ綜せるハつみふきこゞ志ゞ

饒舌録下巻終

文化元年甲子仲秋刻成
同十三年乙亥季冬發行

發行書肆

松山堂書店
東京京橋南傳馬町一丁目十八番地

松山堂書店
東京神田錦町一丁目十番地

元末綱大人著

俳諧饒舌錄

書肆　松山堂藏版